

近 寄 る

—限られた空間が

広い世界に開かれるとき—

津 守 真

1

近寄ること——大人の福祉施設で

四十歳の男性のMさんが私の傍らに近寄ってきた。私はこれまでズボンのポケットに手をいれて調理場の前で立っている彼の姿しか見たことがなかった。私が彼の肩にちよつとでも手を触れると、肩を引つ込めて拒否した。彼の方から私のそばに寄ってくるなど考えられないことだった。そのときは、Mさんはいつのまにかそつと近寄っていたので、私はそのことに気が付かなかった。ひとりの職員が、「先生に親しみを感じているんですよ」と言つて、「Mさん、なにか欲しかったら頼んでみたら」と話



しかけた。私が「何か用ですか」と尋ねると、彼は私を振り返りながら自動販売機の方に行った。

その翌日も、Mさんはまるで猫のようにいつのまにか私に近寄っていた。自動販売機のコーヒーが欲しいのは明らかだった。自分が住んでいる場所なのに、こんな小さな願望を人に伝えるのをためらっていたのである。敷地の端に数年前に少しおしゃれな造形教室を建てた。そこはいつでもだれでも行って好きなように紙や粘土をいじれるようにしてある。その担当の職員のYさんはだれでもをよく受け入れてくれるので、手があくとそこに走ってゆく人が何人もいる。四十歳、五十歳の男性が何人もここにいてお茶を飲み、引き出しをあげて紙や絵の具を出しているのもほえましい。Mさんは最近ゆきはじめたメンバーである。私の傍らに近寄ってくる背景には彼の中に生じたそのような生活の変化がある。

「近寄る」という小さな行動であるが、そこに示されたその人の関心に答えたことによって、彼は単にひとりの人に何かをしてもらい欲求が満たされたというだけでなく、自分の能動性が確かに答えられる世界があることを知った。そしてその人を通して人間への信頼を学んでいる。

子どもが私のそばに近寄ってくるときの大切さを、私は保育のさまざまな場面ですらまで何度も語ってきた。子どもが私に関心があるから近寄ってくるのだから、その関心に目をとめることからかかわりは始まる。子どもが手に握った物を見せるとき、



膝にすわるとき、おんぶやだっこを求めるとき、話しかけるときのなど、子どもが私を選んで近寄ってくる時は貴重な時である。それを受ける私がどういう心をもって受けるか、それによってかわりの質がかわってくる。このことは教育でも福祉でもかわらない。

近寄られること

大人に近寄られるとき、ときによって人は押し付けがましさを感じ、自由感を損なわれることがある。

ひとりで感覚をたのしんでいる赤ん坊が、授乳の時間に気を奪われている母親にバタバタと近寄られるとき赤ん坊は驚き、静かな自由が破られる。

幼稚園や保育園で、何かをしなればという大人の側のあせりや過剰な教育意識が先だって子どものそばにいくと、子どもは私から離れてゆくことが多い。そのように近寄られた大人に圧力を感じるのだろう。機会があれば大人の意図する方向に誘おうと思っているとき、近寄られた子どもはその大人に好感をもたないだろう。こんなことをしたら困ると思っで見ているときには子どもは監視されていると感じ、近寄るとは逆に、大人を避ける。子どもが自分で動けるようにと願ってそばにいる大人を子どもはすぐにうけいれる。子どもは近寄る大人の心に敏感である。

近寄るときには、優しさを心に用意することを忘れないでいたい。



一九七〇年代の後半、私はオランダの現象学者、エディット・フェルメール先生からさまざまなことを教わった。保育の現場で私と子どもたちの遊びを一緒に見るのが私も楽しみだった。謙虚で控えめな先生は、私が行動を表現として見る見方に賛同して、西欧の文化の中で思索されてきた書物を何冊も紹介してくださった。あるとき、ミンコフスキーを引用して「宇宙論」に言及され、この美しいフランス語を英語に翻訳するのは困難なことだと言いながら先生は私にタイプライターで打った数枚の英訳文を送ってくださいました。

「身体の運動に習熟することは、空間感覚の獲得と密接に関連している。子どもは三歳くらいになると跳ぶように弾みをつけて歩く。もはやよちよち歩きの幼児が床の上を一足ずつ歩くのではない。股をひろげてバランスをとる必要がないから態度も変化する。子どもはより大きな空間の自由を得て、ゆとりある寛容な態度を身につけたことと表現である。空間を横切ることによって、子どもの身体は単に動き回るための道具ではなくなる。身体の運動が精神的存在を実現する。」

「ボルノウは二種類の空間を区別する。部屋の空間は感覚的経験の世界である。すなわち眺望がそこで終わる地平線によって囲まれた世界である。囲まれた部屋は安全な空間であり、自分の世界を発見しに出かけてゆくための地盤となる中心―家―であ



る。幼児は囲まれた部屋の中に住んでおり、生活世界の周囲の天文学的な無限の認識はない。ボルノウの意見に従えば定冠詞をもった“der Raum”（部屋）は定冠詞をもたない“Raum”（空間）とは区別せねばならない。なんとすれば部屋は物と物との間の空間であり囲まれた安全な空間であるのに対して、スペース（宇宙）は意味を発見し発展させる自由な空間である。」

「子どもは運動によって物のまわりを歩き回り、自分の観点から部屋の空間関係を発見する。食器棚の『うしろ』は自分の身体との関係で理解される。階段を昇ったり降りたりすることが物の位置を変化させる。物は身体の『上に』来たり『下に』来たりする。それは私共の精神の出来事である。子どもは身体を動かして空間を横切り、物との関係を積極的に広げることによって部屋のなかの位置関係を展開させる。つまり、身体で空間を動き回ることによって精神の自由が得られる。（ミンコフスキーはそこから更にイメージーションとファンタジーについて述べる。）」

「身体運動の自然の発達のみでなく、言語を学ぶという教育学的援助によってこの関係は一層明瞭になる。椅子は窓の近くにある。本はテーブルの上にある。庭に入って行く、家から出ていくのは運動による空間の横断のみでなく精神の面での意味を指示している。言葉によって人は主観に固定されずにより広い間主観的な意味を獲得する。」

身体のの小さな動きを通して子どもの精神の世界を見ることが、保育者はそれに応答す



るのであることを、私はフェルメール先生と語り合った。一九七九年に私はユトレヒト大学を訪れた。空港に出迎えて下さったフェルメール先生は小さなフラットの自宅のために朝食を用意しておられた。食卓のチーズ入れからブルーチーズの一切れを先生はだじそうに取り出して私にすすめられた。以来私はブルーチーズを食べるたびにフェルメール先生の文化の香りを思い出す。Mさんにとってもコーヒイは文化への窓口なのかもしれない。

3

入園したばかりの三歳の幼児が、学校の中を何週間も歩き回るうちに、眉間の皺がなくなり、大きな声で笑い、自由感を得てゆく。幼い子どもが机の上の物に手をふれたとき叱られると全宇宙が閉ざされたかのように感じる。限られた空間の中で能動性を実現することが、子どもの精神を宇宙にまでひろげる。人に対する信頼と、自分の能動性に対する自信とは人間の成長の基盤である。それを体験した人間は、試行錯誤によって現実の限界をも自ら受け入れてゆく。試行錯誤のことを英語で“trial and error”という“trial and right”とは言わない。自分で能動的にすることが大切で、そうすれば間違ったときには人間は自分で訂正する。正しいことだけを教えられたのでは人間の成長はない。